様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　１日現在

機関番号：８２１１１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2009～2011
課題番号：２１６５８０７８
研究課題名（和文）農業生産・農産物流通活動に対する倫理学的研究の有効性検証

研究課題名（英文）The inspection of efficiency to Ethics approch for aglicutural production and products distribution activity

研究代表者
高橋　太一（TAKAHASHI　TAICHI）
独立業法人農業・食品産業技術総合研究機構・東北農業研究センター
生産基盤研究領域・主任研究員
研究者番号：70370624

研究成果の概要（和文）：本研究は、社会科学の農業問題について、倫理学の分析手法、概念を援用し、その有効性を示すことを目的としたものである。まず、応用倫理学としての経営倫理学の視点から問題分析を行った。また、倫理学における概念である、ディレンマ、矛盾、葛藤などを使い問題の構造を解明し、これらの分析結果から、問題への対応策などを提案している。以上のような研究により研究の目的はほぼ達成されたと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is present a utility of Ethics approach for Social Scientific agricultural issues. We analyzed some issues with view point of business ethics in applied ethics. Find out structure of the each issues with the use of ethics concept. There are dilemma, contradiction, conflict etc. We proposed that measures for the agricultural issues mentioned above. Hence, we almost achieve the purpose of this study.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	600,000	0	600,000
２０１０年度	500,000	0	500,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	150,000	1,750,000

研究分野：農業経営学、倫理学
科研費の分科・細目：基盤的萌芽
キーワード：農業経営、農業組織、倫理学的接近、ディレンマ、矛盾、葛藤、

１．研究開始当初の背景
（１）我が国の農業問題は効率、生産力の問題だけでなく、担い手の経営理念と目的、置かれた経済的、社会的環境の関係、農業関係各主体の意思決定方法など、多数の要因が複雑に関係している。また、近年は、環境、食糧自給力・食料自給率、遺伝子操作技術などの問題が消費者サイドから提起され、そのなかでも消費者がもっとも憂慮しているのは「食と生産の安全・安心の問題」である。
（２）農業の社会科学的な問題には、経済学的な自由競争と制度論、社会学的な社会構造分析、主体行動分析からの接近が多くなっている。しかし、これ

らの手法では、一部の要因については有効であっても、他の要因の説明としては不十分であることが散見されていた。
(３)農業における社会科学的問題の解決は経済学における費用便益を中心にした分析、では解決が期待できない問題が増加している。これは農業が家族経営を中心としつつ、地域社会における社会構造の中で営まれる場合が圧倒的に多いために、経営経済的関係の優劣だけでなく、家族経営としての農家生活のあり方、地域における主体的な構成員としての役割など、複雑な関係の下で営農活動が行われているためである。また、農業経営だけでなく、農業関連組織も同様の社会、経済的状況下に置かれている。一方、社会学的な分析は、関係性や構造の分析としては有効であるが、人間行動のあり方、基本としての重要性については十分踏み込めない場合も多い。農業問題は、従来型研究の単一分野個別の分析手法、評価指標だけの分析手法だけ容易に解決できない問題を多く抱えている。
(４)以上のことから、現在の社会科学的農業問題については、これまで適用されていなかった研究手法、概念による接近、分析を試みることで、問題解決の糸口を発見するという研究課題を設定することが可能と考えられた。そこで本研究課題では、これまでに農業問題ではあまり試みられることの無かった倫理学からの接近を試みることとした。倫理学は倫理的規範の設定、問題状況に対する倫理学的な論理性に基づいた分析などによって、関係する主体における問題の共有化、問題解決規範の支持可能性の拡大などを通じて、問題を解決する方法を有している。このような点から、農業問題に関係する主体が支持できる倫理学による規範の発見と、規範共有化による合意形成過程の分析アプローチが有効であると考えられた。

２．研究の目的
(１)倫理学は、行動規範を論理的に提起する純粋倫理学と、純粋倫理学が示す論理的な帰結を、人間社会において具体的な行動内容として形成する応用倫理学がある。本課題では、農業問題に対する倫理学による接近を応用倫理学の一部門として位置づける。応用倫理学は医療、環境、経済、経営、生命等の問題で活用されているが、応用倫理学の基礎には純粋倫理学の蓄積があり、それも活用することが前提になる。
(２)本研究課題においては、農業生産と農産物流通販売の場面を対象として、近年喫緊と考えられている問題について、倫理的分析の有効性を、農業倫理学の研究成果として提示することを目的とした。
　農業の生産と食糧自給の価値規範、技術選択と使用方法、農業生産主体の特性と組織活動、農産物流通における「安全・安心」状況等について、応用倫理学の視点からの実際的な行動規範についての分析を行い、倫理学的な接近が農業問題に関して有用性を持つことを提示する。また各問題における行動規範の理解と共有化にともなう合意形成方法、合意形成による問題解決のための自律的活動、納得的な行動内容の解明を行う。以上によって、農業問題における倫理学的分析の先駆的な研究として提示することが可能になろう。

３．研究の方法
(１)本研究課題は農業活動について倫理学的な視点からアプローチし、農業研究に対する倫理学的接近の有効性を検証することを目的としている。そのため研究方法としては大きく３つの部分から形成される。第一に、倫理学における成果を農業活動分析に有効な論理、視点として整理することであり、第二に、農業活動において発生している問題のうち農業生産、農産物の流通販売について担い手（主体）が直面する問題を倫理学的視点から実証的に分析することである。そして第三に、農業活動の問題について、倫理学的な規範を発見・形成し、倫理学的分析と規範形成を通じた問題解決の合意形成方法を解明することである。
(２)平成21年度前半～22年度後半において、農業活動分析に有効な倫理学理論の整理を行った。倫理学は哲学の一分野として学問的蓄積は深く、その範囲も広いので、農業活動分析に相応しい論理的内容、農業活動にも適用できる規範、倫理学的視点の整理が必要不可欠になる。本課題では、研究目的達成のために農業活動について「倫理学者からの抽象的、理論的な回答をどう具体化すればよいのか」という視点に

たち倫理学の整理を行った。
（３）平成22 年度前半～23年度後半においては、農業生産、農産物流通販売活動の問題に対する倫理学的分析を行った。本課題の研究期間当初においても、農業、食料生産に対しては法令遵守、説明責任、製造・生産者責任等、一般的に認められる倫理規範を前提とした、農業活動のあり方、食の安全・安心に対して「企業（主体）の枠を超えた職業規範の確立が必要」であるとされていた。そのためには規範の内容と必要性を倫理学的な論理によって示すことも有効な方法の一つであると考えらたことから、研究期間の後半において上述の内容での研究を進めてきた。ここでは安全、安心などの流通販売の問題だけでなく、農業生産主体の円滑な活動、運営などを保障するための組織問題等も研究対象に含めた。本課題の目的に照らすと、ここでの倫理学的分析が倫理学的アプローチの有効性を示すものとなる。

４．研究成果
（１）研究計画に沿って、農業活動分析に有効な倫理学理論の整理、農業生産、農産物流通販売活動の問題に対する倫理学的分析、農業生産、農産物流通販売活動の問題についての倫理学規範発見と対応策の考案に取り組んだ。
（２）農業活動分析に有効な倫理学理論の整理　－環境倫理学における倫理学理論の整理－
　農業活動に関係の深い応用倫理学の分野として環境倫理学に注目し、環境倫理学と農業活動の関係について整理を行っている。
　環境倫理学においては、人間の存在を中心的に捉える人間中心主義があり、このうち人間に対する効用を重視し、その点での持続性を守れば良いとする強い人間中心主義と、人間社会が長期的に安定するためには人間と環境との調和的関係により配慮すべきだという弱い人間中心主義がある。人間の存在を自然、環境と同等とした人間非中心主義は、必要な場合は環境保全活動を最優先にするべきとの立場にたっている。また、共有地の古典的な自由主義的功利主義に基づく利用が共有地の荒廃をもたらす「共有地の悲劇」を倫理的に重要な指摘を持つものとして取り上げられている。
　環境倫理学では、日本のいわゆる里山が生物多様性において固有の価値を持つものとされ、その保全が強い主張されている。里山の維持のためには、人間の農林業生産活動が不可欠であるため、全国的、面的に里山を維持するためには、平地林を含めた里山林における農林業の継続が重要な課題になる。ただし、里山における農林業活動の維持方策、従来型の農林業作業の継続については非生産者の活動を中心とする事例分析が多く、農林業として里山の保全に寄与する方策が求められる。
　環境倫理学においてはさらに、アニマルウェルフェアと肉食の問題が指摘されている。工業・加工業的畜産生産における動物の扱いと、そこで生産される食肉の利用については動物福祉の観点から大きな問題があるとされている。食糧自給とは別の視点からの指摘であり、今後、この視点からの運動が広がる可能性がある。
（３）経営倫理学による農業活動の分析と論点整理
①農業経営活動における倫理的問題の広がりと意味
　経営倫理に関する問題はあらゆる業種、組織にとって重要な課題であり、農業生産、農業経営においても同様である。一方で、農業生産、農業経営活動に関わる倫理的問題の研究は、農業関連技術の倫理的問題について分析された事例、農協活動違反の事例について分析された事例などがあるがその取り組みはまだ少ない。
　農業生産者、農業関係者の現状としても、一部を除いて農業に関連する倫理的な問題については、関心の薄いのが現状である。しかし、このことは農業における倫理的問題が無いことを意味するものではない。農業が人間にとって重要な役割を持つということは、農業が倫理的問題を起こさずに続けられていく必要性も意味するからである。
　そこで、農業経営調査において得られた情報に基づき、農業経営活動における倫理的問題を把握し分析を行った。農業経営は様々な場面をもつために、そのすべてを捉えきれるものではないが、経営理念・目的、情報倫理、生命倫理、環境倫理の側面から、現実に生じている問題の倫理的側面を明らかにしたぬ。これにより農業経営活動における倫理的問題の多様性と広がりの一端を明らかにしている。
　農業は、人間の食糧生産のために必

要不可欠であるという意味で「正しい」活動としての基本的性格を持つが、そこでは様々な倫理的な問題が生じてることを示した。「善い」農業経営活動とは何か、どのように行われ、誰がそれを担い、社会的にどのように担保するかということの解明のために、農業経営活動における経営倫理的問題の所在について把握することの必要性を提示した。

②農業経営の販売活動と農業関連組織参加に関わる倫理的問題

現在、農業をとりまく問題は様々な変化を見せ、問題が一つの領域に限定され難くなっている。しかし、我が国の農業生産、農業経営、農業（関連）組織の経営活動について、倫理学に基づいた分析、研究はほとんど行われていない。一方で、企業活動に対する経営倫理学からの実践、学問的研究の進展がみられ、経営倫理の視点による問題の把握、解決の取り組みが進められている。農業生産、農産物販売も経営活動としての側面を持つ以上、農業経営、農業生産組織、農業関連組織等の活動においても経営倫理学の視点からの分析は有用な情報をもたらすと仮定される。

このような視点を受け、農業協同組合活動における違反行為の発生を事例として、経営倫理学による分析を試み、その分析に基づいた情報提示によって、経営倫理学における農業関連組織分析の可能性を提示することを目的とした。また、規約違反を単純な規範破りとするのではなく、事例に関連する情勢、農業協同組合の活動目的などに対応させつつ分析し、対象における倫理学的な葛藤、ディレンマ、矛盾の存在を捉え、農業生産組織、農産物流通組織を経営倫理学の分析対象として位置付けている。

分析では、対象事例において、様々な葛藤、ディレンマが生じていることが経営倫理学の論点から明らかにされた。また、農業協同組合の部会規約は倫理的な問題を内包していることも示唆している。

③法令違反事例にみる農業活動の経営倫理問題

農業は多数の家族経営が生産を行い、大量の生産物が流通販売されているため、多くの法的規制では生産の事後に調査、検査等が行われるようになっている。しかし、有機ＪＡＳ法に係わる活動は、同法が資材の選択・購入から、生産、「有機」表示方法にいたるまで、農業活動全般に対して規定しているため、同法に違反した事例には、農業全般の様々な問題が表れている。そこで、有機ＪＡＳ法違反事例をとりあげ、そこにみられる経営倫理問題を対象に、農業活動における問題を分析、考察した。

事例は、ｱ.有機ＪＡＳ表示を意図的に悪用するもの、ｲ.生産者・農業経営者としての能力不足によるもの、ｳ.有機ＪＡＳ認証手続きに対する不備に伴うものであり、農業活動における倫理問題発生の多様性が示唆できるものと考えた。

ｱ.については、有機ＪＡＳ認証制度を悪用するものであり、ＪＡと民間企業が私的利益追求のために共謀したこと、「有機」ブランドへのただ乗りなどの点が、経営倫理学の分析論理によって明らかにされた。とくに農業関連組織であるＪＡが意図的に制度を悪用することは、経済的利益追求と活動目的との関係における倫理的問題にほかならい。

ｲ.は制度の複雑さ、使用資材の多様性などの問題が背景にあるが、基本的には生産者、農業経営者としての能力不足が引き起こしている。ただし、能力不足を単なる経営管理問題とするのではなく、能力向上のインセンティブの一つとして、倫理的行動による、組織内外からの社会的貢献に対する評価の高まりを意識するような、経営者意識の醸成が重要である。農業者の場合は一部の経営者を除いて、「倫理」問題への意識は希薄であり、倫理的問題の学習、把握という段階からの能力育成が必要になっている。ｳ.もｲ.同様に有機ＪＡＳ認証機関の能力、とくに情報管理、認証活動に対する意識の問題は大きい。悪意はなくとも、認証機関でありながら自らの活動によって認証制度違反を生じさせることは、倫理学的には、矛盾を自ら抱えているということである。認証機関という多数の生産者の生産物評価を左右する機関としては、このような問題を生じさせないというための、倫理規範的な意識付けが重要になる。

（４）研究の総括として

以上のような諸点は、研究成果として公表したものを要約したものである。本研究課題の目的は農業問題に対する

倫理学的分析の有効性を示すことにあった。担当者は一人であるが、上述の内容を、査読付論文３本を中心として研究成果として公表しえたことは、倫理学分析が研究手法として有効であり、様々な農業問題の分析手法の一つとして成立することを示すことができたと考える。

一方、研究期間において、東日本大震災による未曾有の災害被害と奉仕や能汚染による、農業に対する外部不経済が発生した。農業をとりまく状況として、科学的な安全性だけではなく、人間が生きていくうえで重要な､「安全」の実感、体得という倫理的内実が深く関わる重要な課題が提起されている。倫理学的概念、手法による農業問題分析の必要性はより高まったといえるであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①高橋太一、有機ＪＡＳ規格違反にみる農業活動の経営倫理問題、日本経営倫理学会誌、19、日本経営倫理学会、2012年１月、pp207-218。

②高橋太一、農業経営活動における倫理的問題の広がりと意味、日本経営倫理学会誌、18、日本経営倫理学会、2011年３月、pp163-174。

③高橋太一、農協部会活動規約違反に関する経営倫理学的接近、日本経営倫理学会誌、17、日本経営倫理学会、2010年３月、pp257-267。

〔学会発表〕（計４件）
①高橋太一、ＪＡＳ規格指導にみる農業活動の経営倫理問題、日本経営倫理学会第19回研究発表大会、日本経営倫理学会、2011年6月19日、麗澤大学（千葉県柏市）。

②高橋太一、農業経営活動における倫理的問題の所在と広がり、第18回研究発表大会、日本経営倫理学会、2010年10月16日、上智大学（東京都千代田区）。

③高橋太一、環境倫理学の幾つかの概念に対する農業から反応、日本倫理学会第61回大会、日本倫理学会、2010年10月10日、慶應義塾大学（東京都港区）。

④高橋太一、農協部会活動違反に関する経営倫理学的接近、日本経営倫理学会第17回研究発表大会、日本経営倫理学会、2009年10月21日、慶應義塾大学（東京都港区）。

６．研究組織
(1)研究代表者
高橋　太一（TAKAHASHI　TAICHI）
独立業法人農業・食品産業技術総合研究機構・東北農業研究センター
生産基盤研究領域・主任研究員
研究者番号：70370624

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし